

【研究報告】

胎盤療法と併用したオゾン療法

小島悦子

日本医療・環境オゾン研究会会報, Vol.13, No.3, 57-59. (2006)

胎盤療法と併用したオゾン療法

山下公園クリニック 小島悦子

要旨 当院では膠原病、リウマチ様関節炎、C型肝炎、糖尿病、脳梗塞などの疾患に対して、オゾン療法と胎盤療法を併用して行うことにより良好な治療効果を得ている。本稿ではオゾン療法、胎盤療法の手技について紹介するとともに、顕著な治療効果が得られた8症例（ベーチェット氏病、甲状腺手術後のC型肝炎、多発性脳梗塞の各1例と糖尿病2例、リウマチ様関節炎3例）について若干の考察を加えて紹介する。

キーワード：オゾン療法、胎盤療法、ベーチェット氏病、甲状腺手術後のC型肝炎、多発性脳梗塞、糖尿病、リウマチ様関節炎

1. はじめに

学生時代から東洋医学の自然治癒力を重んじる治療法に惹かれ、25年前より漢方薬、ゲルマニウム剤の内服、ゲルマニウム温浴などとオゾン療法を主としたクリニックを開設した。6年前、某日刊紙に掲載されたオゾン化オリーブ油の記事から「日本医療・環境オゾン研究会」が設立されていることを初めて知り、その翌年、ロンドンで開かれた「オゾン世界会議」に出席し、その際、「高濃度オゾンによる自家血液療法」すなわち大量自家血液オゾン療法(MAH)を学ぶことが出来た。MAHはある程度以上の免疫力がない場合にはかえって逆効果となることから、ドイツあたりでは免疫力を高めるために胸腺製剤の投与を併用している。わが国では古くから胎盤製剤に、細胞の活性化や免疫力強化の作用のあることが知られ、難治性疾患に用いられてきた。これについてはすでに紀元前460年頃、ヒポクラテスが医療に用いたことが伝えられ、一方、1943年頃からわが国独自の研究がなされた結果、現在ではラエンネック、メルスモンの名のもとに胎盤エキス注射剤として利用されるようになった。ラエンネックは肝障害に対して、メルスモンは更年期障害、乳汁分泌不全に対してそれぞれ健康保険の適用を受けている。

この胎盤製剤とオゾン療法を組み合わせることにより一層高い効果が得られるものと考え、当院では様々な難治性疾患患者にこの併用療法が施された。本稿ではオゾン療法、胎盤療法の手技について紹介するとともに、顕著な治療効果が得られた8症例（ベーチェット氏病、甲状腺手術後のC型肝炎、多発性脳梗塞の各1例と糖尿病2例、リウマチ様関節炎3例）について若干の考察を加えて報告する。

2. 治療方法

2-1 オゾン療法

1. 大量自家血液オゾン療法 (Major Auto-hemotherapy, MAH) :

高濃度オゾンガス (35~40 μ g/mL) 50mLを、患者から採取した血液 100 mLに曝露して作られたオゾン化血液を再度患者に点滴輸血する。オゾンは血液成分と直ちに反応し、完全に消失する。

2. オゾンガスの皮下または筋肉内注射 :

低濃度オゾンガス (2~4 μ g/mL) を 1~2mLずつ圧痛点に局部注射する。

2-2 胎盤療法

1. プラセンタエキス (メルスモン 2 mL + ラエンネック 2 mL) の皮下注射。

2. 胎盤乳剤 5 mL の皮下注射。

3. 治療結果

8症例について主訴および治療経過を中心に記述する。

症例1. 65歳女性 ベーチェット氏病

主訴：10年前よりブドウ膜炎、左網膜色素変性による視力障害

経過：週1回のMAH療法、プラセンタエキス27 μ g/mLの併用を3回続けたあと眼科医の診察を受けたところ、これらの所見に著しい改善が見られ、驚いた。

症例2. 70歳女性 甲状腺手術後のC型肝炎

主訴：疲れやすい、頭痛

経過：週1回のMAH療法、プラセンタエキス 2アンプルの併用を週1回の割合で3年間続けた結果、以下のような検査成績の変動を認めた。

平成14年4月 GOT 139、GPT 195、血小板 16.0

平成17年12月 GOT 31、GPT 31、血小板 17.2

このような検査成績の改善に伴って疲労感もとれ、頭痛もなくなった。

註：GOT、GPTの単位：IU/L。血小板単位： $\times 10^4/\mu\text{L}$ 。

症例3. 53歳男性 糖尿病

主訴：両手指のレイノー症状、しびれ感

経過：MAH療法、プラセンタエキス 2アンプルの併用を週1回の割合で半年間続けた結果、併用2回施行後からレイノー症状の著しい改善を見た。また、ヘモグロビンA1c 12.2が半年間の治療で8.5にまで低下し、これに伴って両手指のしびれ感、眼底所見ならびに視力の改善が認められた。

註：ヘモグロビンA1c：糖尿病の指標、正常値は4.3~5.8%。過去3ヶ月の血糖値を反映する。

考察：糖尿病による末梢循環不全に対しMAH療法と胎盤療法は共に著明な効果があるものと思われる。ドイツを視察した際、重い糖尿病のために片足切断をやむなくされた患者がずらりと並んでMAH療法を受けていたのが印象的であった。その時の話ではMAH療法を続けることにより、もう片方の足は切断せずにすむとのことであった。

症例4. 61歳女性 糖尿病

主訴：糖尿病性眼底出血、眼底乳頭浮腫による視力障害

経過：週1回のMAH療法、プラセンタエキス 2アンプルの併用を2回行ったあと眼科医の診察を受けたところ、眼底乳頭浮腫の消失が認められた。

考察：MAH療法およびプラセンタ療法の効果は、特に眼底に何らかの病変を持った患者の場合に顕著な効果の認められることが多い。

症例5. 72歳男性 多発性脳梗塞

主訴：両手指のしびれ感、不眠、頭重感などが持続

経過：1回のMAH療法により頭重感、不眠が解消し驚く。その後、プラセンタエキス注射併用、週に1回のMAH療法により2ヵ月後には手のしびれもとれて、仕事にもやる気が出てきた。現在、新商品の開発販売を始めている。

考察：脳障害のある患者の場合、はっきりとした効果が自覚できることが多く、"やる気"の出ることがほとんどである。

症例6. 59歳女性 リウマチ様関節炎

主訴：肩の痛み

経過：初診時の検査ではCRP 2.78、RF 62であった。週に2回のMAH療法と胎盤乳剤(5mL)の併用療法を続けたところ、1年後にはCRP 0.3、RF 38と改善し、肩の痛みも軽減したため、現在では農作業の手伝いも出来るほどになっている。

註：CRP：炎症度の指標、正常値は0.3mg/dL以下。RF：リウマチファクター、正常値は20U/mL以下。

症例7. 59歳女性 リウマチ様関節炎

主訴：夜も眠れないほどの肩、手足の激しい痛み

経過：月に2回のMAH療法と胎盤乳剤(5mL)の併用療法を続けたところ、1ヶ月後には夜間の痛みが取れて笑顔で来院するようになった。初診時の検査でCRP 5.64、RF 288だったものが1年後にはCRP 0.53、RF 48と改善した。2年後にはRF 0.2と低下して、海外旅行を楽しめるほどになった。

症例8. 59歳女性 リウマチ様関節炎

主訴：全身浮腫、歩行困難、全身疲労感

経過：8年以上前から週1回のオゾンの皮下注射を続けた。3ヶ月後には全身浮腫が消失し、自発痛も軽減されたため消炎鎮痛剤の使用を中止した。皮下注射は継続。5年前より皮下注射に加えMAH療法、プラセンタエキス 2アンプルの併用(いずれも週1回)によりRF、CRPともに正常値になった。

考察：リウマチ様関節炎に対してオゾン療法と胎盤注射の併用は著しい効果を得ている。オゾンは併用薬剤の効果を増大させる作用のあることが知られており、これによってプラセンタ療法の単独使用よりも高い効果が得られたものと考えている。

4. おわりに

癌やリウマチ、膠原病などの難治性疾患を一つの治療法だけで治すことは特に、困難である。今後は、副作用が出現しない程度の少量の抗がん剤などの化学療法を適宜用いながらオゾン療法、胎盤療法といった自然療法を併用することにより、患者にとってより優しい治療法の確立が必要ではないかと考えている。

病は不安で苦しいものである。だからこそクリニックは明るく、楽しく、やすらげる場所ではなくてはならないと思う。病院やクリニックに行くことが楽しみになるような、ドアを開けたとたんホッとすると、そんな場所でありたいと願っている。患者さん自身が気づいていない、訴えの根源にあるストレスの原因を一緒に聞き、考え、解明してゆき、「思いっきり泣いたり、笑ったりできた時にこそ頑固な痛みやしびれが徐々に消えてゆく」、そんな例を多く経験するようになった。

オゾン療法、胎盤療法、ゲルマニウム療法のほかにもまだまだ未知の有効な治療法があると思われる。しかしながら、人間にだけ与えられている「想念のちから」が自律神経に作用し、筋肉のアンバランスな緊張を生み、様々な病の症状を引き起こしているということも忘れてはならないことだと考える。

基礎解説—免疫 28

ハプテン・キャリアーとB細胞・T細胞

武庫川女子大学薬学部 扇間昌規

遺伝的に同一と見なされる純系マウスを使って、新たなハプテン・キャリアー系を武器にして免疫系の細胞の移入実験が行われた。抗体の産生に必要なT細胞とB細胞が抗原分子のどこをつかまえて（認識すると言う）協力し合っているのかが明らかにされた。少々複雑なので、図で説明する。

同じ系統のマウスを2グループに分け、それらのマウスに異なるタンパク質で最初の抗原刺激を行う（抗原を注射する）。この操作を第1次刺激と呼ぶ。刺激を受けたマウスの免疫系の応答を第1次応答と呼ぶ。この第1次刺激の抗原として、例えば卵白リゾチーム（図中で簡単な曲線）と、ウシ血清アルブミン（図中で複雑な曲線）を使用したとしよう。注意する点は、ここで、卵白リゾチームの方には前もって、人工的に低分子有機化合物を結合させてある。この低分子化合物がハプテンと呼ばれる部分で、図では★で表すことにする。したがって、卵白リゾチームはキャリアーになっているわけである。こちらを（ア）で示した。一方何も操作していないウシ血清アルブミンを（イ）で示した。

第1次刺激をしてしばらく経ってから、それぞれのマウスよりリンパ節や脾臓を取り出し、構成する細胞を殺さないようにはばばらにほぐしてから、ナイロンウールカラムを通して、T細胞とB細胞に分離する。

他方、同系の正常なマウスをやはり2つのグループに分け、両者に致死量のX線を照射しておき、それらの免疫系の細胞を破壊しておく。

次いで細胞の移入実験である。（ア）と（イ）で第1次刺激された、あるいは第1次応答を

